

『徒然草』研究 —— 第三八段の価値 ——

The Study of “Tsurezuregusa” —— The Importance of Chapter 38 ——

土屋 博映

Hiroei TSUCHIYA

要 旨

本稿は「04紀要」掲載論文、「09紀要」掲載論文をふまえ、第一部末尾部分の章段と第二部冒頭部分の章段を吟味することにより、第一部冒頭部と第二部末尾部の境界を明確にし、あわせて著者兼好の思考の変遷を明らかにしていこうとするものである。

09紀要では、第三二段から第三七段を一部から二部への「つなぎの巻」ととらえ、第三八段を、「復活」の謎を解く段だと考えたのである。

本稿は「一、はじめに 二、最近の『徒然草』研究から 三、従来の『徒然草』観 四、本分の考察 五、第三八段の再検討 六、一部の関連する段 七、『方丈記』との関連 八、第三八段の過激性 九、結論」の八章からなる。一番重視したのが第三八段であり、本段に、以前の段はどのように流れ、関連しているのかということと、本段以降どのように流れ、展開していくかという点に重きをおいた。その結果、一部から二部への、彼の執筆態度(姿勢)が、書物(漢籍)を友

としているうちに、老荘思想に大きな影響を受け、老荘思想を根幹に、成長・発展したとう事実を物語っていると推定された。

二部は、第三一段から書き始められ、第三七段まではいわゆる「つなぎの巻」と考える。

第三二段からは、基本的に、抽象的な、無名の人間の意見をとりあげ、「をかし」「よし」と肯定している。そして、それこそが、本作品の意義だと確認し、第三八段を力強く記すに至った。その後の兼好の価値観は、第三九段の法然上人の教え、第四〇段の因幡国の娘の話、第四一段の競馬にまつわる話、第四二段の恐ろしい病気にかかった行雅僧都の話などへとバラエティに富んだ内容を描き出す。これらはいずれも新しい発見である。兼好の既得の知識・価値観からは想像もつかない事実の発見に目をむけたと言えよう。

とにかく第三八段は、本作品にとって、もつとも重要な段の一つとして位置づけておかななくてはいけないというのが本稿の結論である。

一、はじめに

「跡見学園女子大学短期大学部紀要 第四十集」に『徒然草』研究の「序章」として、序段のあり方について発表し、「跡見学園女子大学文学部紀要 第四十二号」に『徒然草』研究——兼好の思想の由来——として、第一部の内容について発表をした。本稿は以上二論文（前者を「04紀要」、後者を「09紀要」と呼ぶ）をふまえ、第一部末尾部分の章段と第二部冒頭部分の章段を吟味することにより、第一部冒頭部と第二部末尾部の境界を明確にし、あわせて著者兼好の思考の変遷を明らかにしていることとするものである。

まず「04紀要」から引用する。

「1、第一段の『願はし』の流れは、第二五段まで続いている。ただし第一〇段から少しずつその流れが変化し、第一四段で、『願はし』の流れは途絶える。

2、第一五段からは『旅だち』からの単なる連想の流れで、これが第一八段まで続く。ここには、1のような根底を『願はし』で貫くようなものはない。

3、第一九段は『折節の移りかはる』ことについて述べた。本段では『源氏物語』や『枕草子』への意識が見られた。本書を、そういった古典となぞらえるという意識のあらわれであろう。そこから第二四段までは、やはり根底を貫く思想的なものを感じられず、連想

の発展で記述されているようだ。とくに第二四段などは『枕草子』の類集段を模倣しているようなところもあって、兼好自身の姿勢の不安定さを感じさせる。

4、第二五段から第三〇段までは、マイナスの言葉が多用され、彼自身、もともと精神的に落ち込んでいるようにうかがえる。語で言えば『かなし』の多用である。しかし第三〇段で人間のはかなさから、千年の寿命といわれる松でさえ、薪となり、お墓すらなくなる、ということを書き記すことによって、人生を客観的に見る姿勢ができたのだろう。

5、第三一段からは、感傷にひたっていない、ということから、ここから随筆家、兼好の本当の旅立ちが始まったと考えてよいと思われる。（中略）（序段が）『あやしくこそものぐるほしけれ』と、自分を見つめて、ある開き直りの境地を表しているとみれば、やはり従来の学説通り、第三〇段を書いた時点で、いったん筆を置き、しばらくの時間を隔てた上で、人生を客観的に見つめられるようになって、第三二段を記す前におかれたものと見るのが妥当であろう。」

以上が「04紀要」の抜粋である。各段に用いられた心情語を中心に、著者兼好の思考の変遷を考察したものであり、第三〇段までを第一部と推定している。

続いて、「09紀要」をとりあげる。

「三〇段までは、『枕草子』の影響をもっとも受けていると考えたい。雑纂形態であること、類集段（「は」型「もの」型）の影響が形の上で見られること、『枕草子』「清少納言」と明確に記していること。『徒然草』は、『枕草子』から、表現形態と、発想の自由さを学んだ。そこから彼独自の随筆文学に進んでいく。その契機と見られる段は三八段である。」

「私は、三〇段を仮にそう（身内の死にショックを受けた直後に記したと）位置づけてみたいのである。そして、彼は、しばらく、筆を置いたと、いや置かざるをえない心の状態に陥ったと、推定する。

しかし、彼は、再び筆を取り上げる。それが「雪のおもしろう降りたりし朝」（三二段）と「九月廿日の比」（三二段）である。この二段は、今は「亡き人」の心に残る言動を挙げているところが共通している。兼好の心情は、人は死んでも、その言動は自分の中に生きていくということへの確認であったのではないか。それは、三〇段までの、たとえば『文選』による「去る者は日々に疎し」という、ある意味で、故人に対し否定的な、人生に消極的な、そういった姿勢が、人生を肯定する姿勢へと転換したことを意味しているのである。

では、一体そういう姿勢はどこに由来するのか。三〇段はまさに人生に絶望した、極端に言えば、「遺書」ともいえるような内容である。彼はいったん死に、そして「復活」した。その原動力は何か。それは当然のことながら、彼が『徒然草』の執筆を中断していた間

に経験したことである。その人生観を逆転させるほどの経験とは、何か。それは、書物から、としか考えられない。なぞを解く鍵は、「今の内裏」（三三段）から「疎き人の」（三七段）までの五段にわたる段（これを仮に「復活」への「つなぎの段」と名づけておく）を経て記される、三八段である。」

「推定すれば、彼は絶望の時期に、毎日毎日、「老荘思想」にあたる書物をむさぼるように読み続けたに違いない。無為自然をとく思想には、まさに目から鱗がおちる思いであったろう。「老荘思想」が兼好を絶望の淵から「復活」させた、それが『徒然草』を再執筆させ、本格的な随筆へと導いたのである。」

このように、09紀要では、第三一段から第三七段を一部から二部への「つなぎの巻」ととらえ、第三八段を、「復活」の謎を解く段だと考えたのである。

本稿では、以上二論文の後を受けて、『徒然草』の一部と二部の境界と、作者兼好の根底に存在する思考の変遷とを明らかにしたいと考えている。

二、最近の『徒然草』研究から

平成21年、『徒然草』に関する大著が同時に二冊刊行された。一つは稲田利徳氏の『徒然草論』³ もう一つは島内裕子氏の『徒然草文化圏の生成

と展開」である。ここで、この二書から、一部・二部に関わる部分を抜粋してみる。まずは前者稲田氏の『徒然草論』から抜粋する。

「三十段ころまでの執筆に関しては、説話的章段や有職故実・事物考証的な章段を盛り込む意図はなかったが、執筆中断の後、その類の内容の章段も積極的に盛り込むという執筆方針の変更をかなり意識的に遂行したのではないかというのが、私の仮説であった。」

「『徒然草』を味読し、三十段ころまでが詠嘆的無常観、それ以降は自覚的無常観とでも称すべき、無常思想の変化のあることを提言し、三十段ころまでと、それ以降との思想の異質性に初めて言及したのは、西尾実氏であった。(中略)三十段ころまでと、それ以降の異質性は、その後も、感情語の頻度数の方面、あるいは係助詞や文体などの相違からも論証され、やがて執筆時期に関わる成立論にまで及ぶに至っている。」

「要するに兼好は、三十段ころまでは執筆に当って、説話的な内容の章段は盛り込まないという明確なジャンル意識をもっていたというのが、私の仮説であった。」

「三十段ころまでは、まさしく序文にいうように、『枕草子』などを念頭にしながら、心のうちに想起されることを次々と書き記し、しかも、そこに自己の意見というものが、かなり強く開陳されている。」
「やがて執筆中断期間の後、再び筆をとったとき、そこに説話的章段や有職故実的章段などを盛り込むという執筆方針の変更を行ったの

は、読者を強く意識したこと、それは還言すれば、自分の術作するものが、長く人々の間に珍重され、読み継がれることを希求したこともでもある。」

以上『徒然草論』の抜粋だが、稲田氏は、三〇段ころまでを一部と考えている。また、そこまでは、執筆に関して「説話的章段や有職故実・事物考証的な段を盛り込む意図はなかった」とされ、それ以降、「執筆方針の変更がかなり意識的に遂行した」とされているところに特徴がある。ただし、「執筆方針の変更」は、「読者を強く意識した」という点には問題があるかとも思う。

次に島内氏の『徒然草文化圏の生成と展開』から抜粋する。

「先に述べたように、徒然草の最初の部分には、兼好の現実への失望感とその反動としての理想主義的なものが見方が表れていると解釈できる。つまり、徒然草執筆の最初の原動力は、「つれづれ」という、なすこともない所在無い停滞した時間の中で、周囲に満足できない孤独な青年が、本の中に見出した数々の「理想」によって「現実」とのギャップを埋めることだった。こうあってほしいと思う世の中のあり方を書き連ねていったものなのである。」

「ところが第十九段「折節の移り変はるこそ、ものごとにあはれなれ」の段で兼好自身が自覚したように、彼が書くものは「源氏物語」や「枕草子」の圧倒的な影響の下にあった。「古典の呪縛」とさえ言

えるような影響力から脱却するために兼好がとった執筆の方向転換が、第十九段の冬の描写である。(中略) ここから、それまでのような古典からの引用中心の書き方ではなく、もっと自分が体験したことを中心に記述するようになる。」

「書き方の変化は、何と連動しているのか。兼好の価値観や人間観が変わってきたのである。(中略) 徒然草の執筆開始当初、兼好の頭にあった「人間」というのは、ごく限られた範囲の人間でしかなかったのである。」

「このように徒然草の流れを大きく捉えた場合、転換点となっているのは、第三十八段から第四十一段までの一連の章段である。(中略) 読書の世界から現実の世界へと、兼好の関心が大きく移ってきたのである。」

「第三十八段で兼好は人間の生き方の理想について根底から考察する。」

「こうして第三十八段は、究極の理想の生き方を追求してははずだったにもかかわらず、最後は不毛な地点に到達してしまい、これ以上一歩も進めないような状況が出現してしまっている。」

「いずれにしても、いままでの彼の生き方や価値観が、ここで壁にぶつかったということである。」

島内説では、転回点が、第三八段から第四一段までの一連の章段とされる点に特徴があり、これには賛成したい。ただ「これ以上一歩も勧め

ないような状況」とか「壁にぶつかった」とかいう考えには、容易に納得はしがたいが。

稲田氏、島内氏の論には傾聴されるものが多いが、肯定しかねるものも存在する。それらをふまえ、次に、従来の『徒然草』観を整理しておきたい。

三、従来の『徒然草』観

一部から二部への変遷に関わる従来の論の代表的として『徒然草の鑑賞』⁵⁾から抜粋する。

「第二七段 殊に新院の御交替には限らない悲哀と、右顧左眄、阿諛追従の人心に限りない人生の空虚と憤激とを感じていたのである。」

「第二八段 橘純一氏の、『徒然草新講』に、「前段御国譲の半面たる院中の物さびしさから、諒闇の事に想ひ及んでその様をのべた。」とあるのが、簡にして要を尽くしているであろう。」

「第二九段 枕草子の「過ぎにし方恋しきもの」、中でも「をりからあはれなりし人の文、雨などつれづれなる日、さがし出でたる。」を頭において書き出された文であることは間違いあるまい。」

「第三〇段 たしかに二八段から三〇段にかけて連鎖的展開のあることが感じられる。結局人の世のはかなさに対する限りない詠嘆である。」

「第三一段 前段までの、人の死についての感想に引き続いて、これを具体的な特定の人の上の事に及ぼし、その「亡き人」の忘れがたい思い出を記したものである。」

「第三二段 前段に引き続き、亡き人を追慕するのであるが、亡き人の優雅な所作や人柄を賞揚している点も前段同様である。(中略)大いに異なる点は、『枕草子』においては、それらは現実的な環境から直ちにもたらされたものであったのに対して、『徒然草』においては、兼好の王朝憧憬の心によって、現実から極めて意図的に選ばれた世界であり、もっとつきつめて言えば、彼によってほとんど仮構的に設定された世界だと言ってもよいことである。」

「第三三段 有職故実の知識にすぐれた玄輝門院のことを「いみじかりけり」として記したものである。」

「第三四段 本段は、前段と同様に、物や事実の認識ということに並々ならぬ関心をいさぐ兼好の一面を語るものである。」

「第三五段 わが書く文字の上手下手にとらわれて、見栄をはって人をして書かせることの愚かさを説いたものである。」

「第三六段 心くばりの濃やかな、さる女人の話であるが、心のゆるやかに和むような、いい話である。」

「第三七段 この段では『朝夕、隔てなく馴れたる人』と『疎き人』とを対比させ、そういう人が、自己の立場から一步退き、または出て、あるいは遠慮ある、用心深い態度を示し、あるいははうちとけた物言いをするのを、それぞれ好ましいこととして認めているのであ

って、兼好はそれだけの奥行ある、身の処し方に感じ入っているのである。」

「第三八段 名聞や利欲に使役されることの愚かさを説く有名な一段であるが、全文ほとんど出典をあげ得る。『寒山詩』『後漢書』『沙石集』『文選』『臣軌』『白氏文集』『小学』『列子』『晋書』『老子』『莊子』『新撰朗詠集』などが諸注にあげられている。(中略)ただひとつ、「才能は煩惱の増長せるなり。」については、全く出典も類句もあげられていないのが目にとまる。(中略)「わたくしの言う第一部と第二部との間に十一年の時間的距離のあることをもってしなれば、説明しがたいことのように思われる。そして兼好の内部における、人間としての成長が跡づけられるように思われる。」

「第三九段 この段は、法然上人の短い一言半句を挙げることによって、よくその教えの真髓を描きだしたものと注目されている。

(中略) この一段の趣旨は、これを兼好が法然の「信仰の骨髄を開示」したものとするものもあり、また老荘的無為自然の人生態度を法然の言葉に見出したものとするものもある。」

「第四〇段 小林秀雄氏は「鈍刀を使って彫られた名作のほんの一例を引いて置こう。これは全文である。——四〇段を引用——これは珍談ではない。つれづれなる心がどんなに沢山な事を感じ、どんなに沢山なことを言わずに我慢したか。」(『無常といふ事』)と言い、これを名作であると断じられている。(中略)兼好は、奇なる人間像のなかに、言いかえれば、奇形という、ある極限的な状況のなかに、は

じめて人間の疑ない存在性が顕れてくるのであることを感じながら、それらを描き出しているもののように思われる。」

各段の一連の流れを、一般ではどのようにとらえられているのかを確認した。注目すべきは、やはり第三八段である。全文ほとんどが、古典、それも中国の漢籍を典拠として論じられているのである。「才能は煩惱の増長せるなり。」は出典がなく、兼好独自の発想という点には注目しておきたい。次に第四〇段にも注目である。小林氏の論は有名だが、「奇なる人間像」のとらえ方にも、やはり注目しておきたい。一連の流れから、問題点は、やはり、第一部と第二部の境界線のとらえ方、その境界線による思想の変遷の意義付け、さらには第三八段についてのとらえ方などであることがわかる。それらを念頭に、本文の考察を行っていききたい。

四、本文の考察

第二七段から第四一段までを掲げる。※ゴシックの部分は土屋が加えたもの

第二七段

御国ゆづりの節会おこなはれて、劍・璽・内侍所わたし奉らるるほどこそ、限りなう心ぼそけれ。

新院のおりぬさせ給ひての春、詠ませ給ひけるとかや。

殿守のとものみやつこよそにしてはらはぬ庭に花ぞ散りしく
今の世のこと繁きにまぎれて、院にはまゐる人もなきぞさびしげなる。
かかる折にぞ、人の心もあらはれぬべき。

第二八段

諒闇の年ばかりあはれなる事はあらじ。

倚廬の御所のさまなど、板敷をさげ、葦の御簾をかけて、布の帽額
あらあらしく、御調度どもおろそかに、皆人の装束、太刀・平緒まで、
ことやうなるぞゆゆしき。

第二九段

しづかに思へば、よろづに過ぎにしかたの恋しさのみぞせんかたなき。

人静まりて後、長き夜のすさびに、なにとなき具足とりしたため、
残しおかじと思ふ反古など破りすつる中に、亡き人の手ならひ、絵か
きすさびたる見出でたるこそ、ただその折の心地すれ。この比ある人
の文だに、久しく成りて、いかなる折、いつの年なりけんと思ふは、
あはれなるぞかし。手なれし具足なども、心もなくて変らず久しき、
いと悲し。

第三〇段

人のなきあとばかり悲しきはなし。

中陰のほど、山里などにうつろひて、便あしく狭き所にあまたあひ
 るて、後のわざども管みあへる、心あわたたし。日かずのはやく過ぐ
 るほどぞ、ものにも似ぬ。はての日は、いと情けなう、たがひに言ふ
 事もなく、我かしここげに物ひきしたため、ちりぢりに行きあかれぬ。
 もとのすみかに帰りてぞ、更に悲しき事は多かるべき。「しかしかのこ
 とは、あなかしこ、跡のため忌むなる事ぞ」など言へるこそ、かばか
 りのなかに何かはと、人の心はなほうたておほゆれ。

年月経ても、露忘るるにはあらねど、去る者は日々に疎しといへる
 ことなれば、さはいへど、そのきはばかりは覚えぬにや、よしなしこ
 と言ひてうちも笑ひぬ。からはけうとき山の中にをさめて、さるべき
 日ばかり詣でつつ見れば、ほどなく卒塔婆も苔むし、木の葉ふり埋み
 て、夕の嵐、夜の月のみぞ、こととふすがなりける。

思ひ出でてしのぶ人あらんほどこそあらめ、そもまたほどなくうせ
 て、聞きつたふるばかりの末々は、哀とやは思ふ。さるは、跡とふわ
 ざも絶えぬれば、いづれの人と名をだに知らず。年々の春の草のみぞ、
 心あらん人はあはれと見るべきを、はては、嵐にむせびし松も千年を
 またで薪にくだかれ、古き墳はすかれて田となりぬ。その形だになく
 なりぬるぞ悲しき。

第三一段

雪のおもしろう降りたりし朝、人のがり言ふべき事ありて文をやる
 とて、雪のこと何ともいはざりし返事に、「この雪いかを見ると、一筆

のたまはせぬほどの、ひがひがしからん人のおほせらるる事、聞きい
 るべきかは。返す返す口をしき御心なり」と言ひたりしこそ、をか
 かりしか。

今は亡き人なれば、かばかりの事も忘れがたし。

第三二段

九月廿日の比、ある人にさそはれたてまつりて、明くるまで月見あ
 りく事侍りしに、おほしいづる所ありて、案内せさせて入り給ひぬ。
 荒れたる庭の露しげきに、わざとならぬ匂ひ、しめやかにうち薫りて、
 しのびたるけはひ、いともあはれなり。

よきほどにて出で給ひぬれど、なほ事ざまの優におぼえて、物のか
 くれよりしばし見あたるに、妻戸を今すこしおしあけて、月見るけし
 きなり。やがてかけこもらましかば、くちをしからまし。跡まで見る
 人ありとは、いかでか知らん。かやうの事は、ただ朝夕の心づかひに
 よるべし。その人、ほどなく失せにけりと聞き侍りし。

第三三段

今の内裏作り出されて、有職の人々に見せられけるに、いづくも難
 なしとて、すでに遷幸の日ちかく成りけるに、玄輝門院の御覧じて、
 「閑院殿の櫛形の穴は、まろく、縁もなくてぞありし」と仰せられけ
 る、いみじかりけり。

これは葉の入りて、木にて縁をしたりければ、あやまりにて、なほ

されにけり。

第三四段

甲香は、ほら貝のやうなるが、ちひさくて、口のほどの、細長にさし出でたる貝のふたなり。武蔵野国金沢といふ浦にありしを、所の者は「へなたりと申し侍る」とぞ言ひし。

第三五段

手のわろき人の、はばかり文書きちらすは、よし。みぐるしとて、人に書かするは、うるさし。

第三六段

「久しくおとづれぬ比、いかばかり恨むらんと、我が怠り思ひ知られて、言葉なき心地するに、女の方より、『仕丁やある、ひとり』など言ひおこせたるこそ、ありがたくうれしけれ。さる心ざましたる人ぞよき」と、人の申し侍りし、さもあるべき事なり。

第三七段

朝夕へだてなく馴れたる人の、ともある時、我に心おき、ひきつくろへるさまに見ゆるこそ、「今更かくやは」など言ふ人もありぬべけれど、なほげにげにしく、よき人かなとぞ覚ゆる。

疎き人の、うちとけたる事など言ひたる、また、よしと思ひつきぬ

べし。

第三八段

名利に使はれて、閑かなる暇なく、一生を苦しむるこそ、愚なれ。財多ければ身を守るにまどし。害をかひ、累を招く媒なり。身の後には金をして北斗をささふとも、人のためにぞわづらはるべき。愚かなる人の目をよろこばしむる楽しみ、またあぢきなし。大きな事、肥えたる馬、金玉の飾りも、心あらん人は、うたて愚かなりとぞ見るべき。金は山にすて、玉は淵に投ぐべし。利にまどふは、すぐれて愚かなる人なり。

埋もれぬ名を長き世に残さんこそ、あらまほしかるべけれ、位高く、やん事なきをしも、すぐれたる人とやはいふべき。愚かにつたなき人も、家に生れ時にあへば、高き位に登り、奢りを極むるもあり。いみじかりし賢人・聖人、みづから賤しき位にをり、時にはあはずしてやみぬる、また多し。偏に高き官・位を望むも、次に愚かなり。

智恵と心とこそ、世にすぐれたる誉も残さまほしきを、つらつら思へば、誉を愛するは、人の聞をよろこぶなり。誉むる人。そしる人、共に世に止まらず、伝へ聞かん人、またまたすみやかに去るべし。誰をか恥ぢ、誰にか知られん事を願はん。誉はまた毀の本なり。身の後の名、残りに益なし。これを願ふも、次に愚かなり。

ただし、しひて智をもとめ、賢を願ふ人のために言はば、智恵出でては偽あり。才能は煩惱の増長せるなり。伝へて聞き、学びて知るは、

誠の智にあらず。いかなるをか智といふべき。可・不可は一条なり。

いかなるをか善といふ。まことの人は、智もなく、功もなく、名もなし。誰か知り、誰をか伝へん。これ、得を隠し、愚を守るにはあらず。本より賢愚・得失の境にをらざればなり。

迷ひの心をもちて名利の要を求むるに、かくのごとし。万事は皆非なり。言ふにたらず、願ふにたらず。

第三九段

或る人、法然上人に、「念仏の時、睡にをかされて行を怠り侍る事、いかがしてこの障りを止め侍らん」と申しければ、「目の醒めたらんほど、念仏し給へ」と答へられたりける、いと尊かりけり。また、「往生は、一定と思へば一定、不定と思へば不定なり」と言はれけり。これも尊し。

また、「疑ひながらも念仏すれば、往生す」とも言はれけり。これもまた尊し。

第四〇段

因幡国に、何の入道とかやいふ者の娘、かたちよしと聞きて、人あまたいひわたりけれども、この娘、ただ粟をのみ食ひて、更に米のたぐひを食はざりければ、「かかる異様のもの、人に見ゆべきにあらず」とて、親、ゆるさざりけり。

第四一段

五月五日、賀茂の競べ馬を見侍りしに、車の前に雑人立ち隔てて見えざりしかば、おのおの下りて、埒のきはに寄りたれど、ことに人多く立ちこみて、分け入りぬべきやうもなし。かかる所に、向ひなる棟の木に、法師の、登りて木の股についゐて物見る、あり。とりつきながら、いたう睡りて、落ちぬべき時に目を醒ます事、度々なり。これを見る人、あざけりあさみて、「世のしれ物かな。かく危き枝の上にて、安き心ありて睡るらんよ」と言ふに、我が心にふと思ひしままに、「我等が生死の到来、ただ今にもやあらん。それを忘れて、物見て日を暮す、愚かなる事はなほまさりたるものを」と言ひたれば、前なる人ども、「誠にさにこそ候ひけれ。尤も愚かに候」と言ひて、みな後を見かへりて、「ここへ入らせ給へ」とて、所を去りて、呼び入れ侍りにき。

かほどの理、誰かは思ひよらざらんなれども、折からの、思ひかけぬ心地して、胸にあたりけるにや。人、木石にあらねば、時にとりて、物に感ずる事なきにあらず。

第四二段

唐橋中将といふ人の子に、行雅僧都とて、教相の人の師する僧ありけり。気の上る病ありて、年のやうやうたくるほどに、鼻の中ふたがりて、息も出がたかりければ、さまざまにつくるひけれど、わづらはしくなりて、目・眉・額なども腫れまどひて、うちおほひければ、物

も見えず、二の舞の面のやうに見えけるが、ただ恐ろしく、鬼の顔になりて、目は頂の方につき、額のほど鼻に成りなどして、後は坊の内の人にも見えずこもりゐて、年久しくありて、なほわづらはしくなりて死ににけり。

かかる病もある事にこそありけれ。

以上の各段につき、ゴシックを加えたのは、誰の行為か、それを兼好はどうとらえているかを一見して判断できるようにするためである。それをもとに、簡潔にまとめておく。

- 第二七段 天皇の讓位↓院には参上する人もない↓「さびしげなる」
- 第二八段 「諒闇」の年の感慨深さ。↓「あはれなる」
- 第二九段 過ぎ去った昔への恋しさ↓「かなし」
- 第三〇段 人の死後の悲しさ↓「悲しき」
- 第三一段 亡き人の思い出↓「をかしかり」
- 第三二段 亡き人の思い出↓「ものあはれなり」
- 第三三段 玄輝門院の思い出↓「いみじかり」
- 第三四段 「甲香」の金沢の名称↓「へなだり」
- 第三五段 字の下手な人↓「よし」「あし」
- 第三六段 好ましい女↓「ありがたし」「うれし」
- 第三七段 遠慮する人、遠慮のない人↓「よし」
- 第三八段 名誉や利益をもとめ、一生あくせくする人↓「愚かなれ」

第三九段 法然上人の発言↓「尊し」

第四〇段 因幡国の娘（栗ばかり好む）↓親が変わった娘の結婚を許

さない

第四一段 賀茂の競馬での自賛↓自分の意見を民衆が認めた

第四二段 行雅僧都の恐ろしい病氣↓かかる病もある事にこそありけれ

09 論文でも記したことだが、「第三〇段」前後を第一部として、出家前の若き兼好の著したものである、というのが一般的な説となっている。しかし、その境界は説により、まちまちであった。

上記の内容から一見して言えることは、第三〇段までが「悲し」系でまとめる段となっていて、第三一段から一転し、それまでの「悲し」という類の、主観性の強い感情語を用いずに、「をかし」「あはれ」「いみじ」「よし」「あし」などの、客観性の強い評価語を用いているということである。

ここで、1で記した、09 論文を再掲する。

「三〇段はまさに人生に絶望した、極端に言えば、「遺書」ともいえるような内容である。彼はいったん死に、そして「復活」した。その原動力は何か。それは当然のことながら、彼が『徒然草』の執筆を中断していた間に経験したことである。その人生観を逆転させるほどの経験とは、何か。それは、書物から、としか考えられない。

なぞを解く鍵は、「今の内裏」(三三三)から「疎き人の」(三七七)までの五段にわたる段(これを仮に「復活」への「つなぎの段」と名づけておく)を経て記される、三八段である。

「名利に使はれて、しづかなるいとまなく、一生を苦しむるこそ愚かなれ。」で始まる段は、実に力強い。細かい検討はまた別の機会に述べたいと思うが、再び極端に言えば、三〇段までの自分の考えをすべて否定しているかとも思われる表現が次々と噴出しているのである。最後は「迷ひの心もちて名利の要を求むるに、かくのごとし。万事は皆非なり。言ふにたらず、願ふにたらず。」とまとめ、冒頭と照応し、一貫性をもっている。力強さがある。

今回の論を進める上で、この内容と基本的には変わらない。しかし、研究の積み重ねにより、補足したいことなどもあり、それらをふまえて、さらに検討してみることにする。

五、第三八段の再検討

ここで、第三八段を再検討してみたい。

冒頭の「名利に使はれて、しづかなるいとまなく、一生を苦しむるこそ愚かなれ。」は、主題として、インパクトがある。「名利」を「愚か」で否定し、さらに最強の係助詞、「こそ」已然形^①を用いている。

以下、財産は不要であり、「利に惑ふはすぐれて愚か」と言い切り、さ

らに、「ひとへに高き官・位をのぞむ」も、「次に愚かなり」とたたみかける。続いて、「身の後の名、残りてさらに益なし」「是を願ふも、次に愚かなり」と「利」に加えて「名」も「愚か」と断定する。これで終われば、本段は、冒頭の一文が主題となり、首尾一貫して、「名利」を否定することになるのだが、実はその後に「ただし」以下の文が補足として存在する。そこに、本稿では注目したい。

これは、前に「智恵と心とこそ、世にすぐれたる誉も残さまほしきを、」と記したことに対する補足である。大体において、この段は、ほとんど全体が漢籍による引用から成り立っているのである。^②その点だけでも大いに注目すべきことなのだが、特に注意しておきたいのは、「ただし」以下は、老荘思想によって注しているということだ。^③つまり、「名利」は否定するが、「智恵と心」は認める、という―作者が本来は認めていた―図式を、老荘思想によって否定する―「智恵と心」も認めない―というまとめとなっているのである。「万事は皆非なり。言ふにたらず、願ふにたらず。」という結論は、冒頭主題をいっそう強めたものとなっている。

これは、一部から二部への、彼の執筆態度(姿勢)が、書物(漢籍)を友としていううちに、老荘思想に大きな影響を受け、老荘思想を根幹に、成長・発展したという事実を物語っていると見えよう。

六、一部の関連する段

本段以前に、本段同様、人生訓的に考えられる段は、私見によれば、

二段存在する。第七段「あだし野の露きゆる時なく」と第一八段「人はおのれをつづまやかにし」がそれにあたる。

第七段を掲げる。

あだし野の露きゆる時なく、鳥辺山の煙立ちさらでのみ住みはつる習ひならば、いかに、ものあはれもなからん。世はさだめなきこそ、いみじけれ。

命あるものを見るに、人ばかり久しきはなし。かげろふの夕を待ち、夏の蟬の春秋をしらぬもあるぞかし。つくづくと一年をくらすほどだにも、こよなうのどけしや。飽かず、惜しと思はば、千年を過すとも、一夜の夢の心ちこそせめ。住み果てぬ世に、みにくき姿を待ちえて何かはせん。命長ければ恥多し。長くとも、四十にたらぬほどにて死なんこそ、めやすかるべけれ。

そのほど過ぎぬれば、かたちを恥づる心もなく、人に出でまじらはん事を思ひ、夕の陽に子孫を愛して、さかゆく末を見んまでの命をあらまし、ひたすら世をむさぼる心のみふかく、ものあはれも知らずなりゆくなん、浅ましき。

本段の主題は「世はさだめなきこそ、いみじけれ。」である。さらに「四十にたらぬほどにて死なんこと、めやすかるべけれ。」と主張を展開するのだが、最後は、「ひたすら世をむさぼる心のみふかく、ものあはれも知らずなりゆくなん、浅ましき。」と感情論でまとめている。

次に第一八段を掲げる。

人は己をつづまやかにし、奢りを退けて、財をもたず、世をむさばらざらんぞ、いみじかるべき。昔より、賢き人の富めるは稀なり。

唐土に許由といひつる人は、さらに身にしたがへる貯へもなくて、水をも手して捧げて飲みけるを見て、なりひさこといふ物を人の得させたりければ、ある時、木の枝にかけたりけるが、風にふかれて鳴りけるを、かしかましとて捨てつ。また手に掬びてぞ水も飲みける。いかばかり心のうち涼しかりけん。」孫震は冬月に衾なくて、藁一束ありけるを、夕にはこれにふし、朝にはをさめけり。

唐土の人は、これをいみじと思へばこそ、記しとどめて世にも伝へけり、これらの人は、語りも伝ふべからず。

本段は「世をむさぼららんぞ、いみじかるべき。」という主題で始まるが、最後は「これらの人は、語りも伝ふべからず。」とあきらめにもた表現でまとめている。

これら二段は、人生訓なのであるが、本稿で問題とする第三八段と比較すると、主張が弱く、とくに結論が尻すぼみに終わっているという感が強い。

第三八段がいかに作者兼好の決意をあらわしているか、意気込みという点で、人生に立ち向かう姿勢がこの二段との比較から強うかがえるのである。

七、『方丈記』との関連

次に『方丈記』¹²から同類の部分を抜粋する。

それ、人の友とあるものは、富めるを尊み、懇なるを先とす。必ずしも、情けあると、すなほなるとをば愛せず。ただ糸竹・花月を友とせんにはしかじ。人の奴たるものは、賞罰はなはだしく、恩顧あつきを先とす。さらに、はぐくみあはれむと、安く静かなるとをば願はず。ただ、わが身を奴婢とするにはしかず。いかが奴婢とするとならば、もし、なすべき事あれば、すなはち、おのが身を使ふ。たゆみならずしもあらねど、人を従へ、人を顧るよりやすし。もし、歩くべき事あれば、みづから歩む。苦しといへども、馬・鞍・牛・車と、心を悩ますにはしかず。今、一身を分かちて、二つの用をなす。手の奴、足の乗物、よくわが心にかなへり。身、心の苦しみを知れば、苦しむ時は休めつ、まめなれば、使ふ。使ふとても、たびたび過ぐさず。ものうしとても、心を動かす事なし。いかにいはんや、常に歩き、常に働くは、養性なるべし。なんぞ、いたづらに休み居らん。人を悩ます、罪業なり。いかが、他の力を借るべき。衣食の類、また同じ。藤の衣、朝の衾、得るにしたがひて、肌をかしくし、野辺のおはぎ、峰の木の実、僅かに命をつぐばかりなり。人に交はらざれば、姿を恥づる悔いもなし。糧ともしければ、おろそかなる報をあまくす。すべて、かやうの楽しみ、富める人に対して、

いふにはあらず。ただ、わが身一つにとりて、昔と今とをなぞらふるばかりなり。

『方丈記』の人生訓的な部分である。「ただ、わが身を奴婢とするにはしかず。」というのが主題と見られるが、いかにも弱々しい主題である。続いて、「人を悩ます、罪業なり。いかが他の力を借るべき。」には語法上の強さは存在するが、内容的には他に働きかけるような強さはうかがえない。最後は「ただ、わが身一つにとりて、昔と今とをなぞらふるばかりなり。」という説明で終わってしまっている。

以上、先の『徒然草』第七段、第一八段に続き、『方丈記』の同様の内容と比較しても、第三八段の主張の激しさが確認できよう。

八、第三八段の過激性

ここで、問題なのは、兼好が、何故ここでこのような過激な主張をしなければならなかったかということである。つまり、第三〇段を境に、第三一段からは「悲しみ」という主観性が消え、「をかし」「あはれ」「よし」などという、人間への客観的評価が第三七段まで穏当に展開されていく。そこで、表面的な観察からは、突然、過激な発言の第三八段が出現するという風に見られてしまう。予兆なしに火山が爆発したようなものと考えられもするのだ。

第三八段が、突発的なものとすれば、ここからを第二部とすべきかも

しれないが、そうすると、第三一段から第三七段までをどう位置づけるかという問題が発生してくる。

実は、これら一連の段を、09 紀要では「つなぎの段」と名づけておいたのである。つまり、第二部は、それまでの感情語でのまとめを、評語でのまとめとした、第三一段からであることは動かしようもない。その「つなぎの段」は第一部を描いた若き日の自分を思い返ししながら、慎重に筆を進めていると見たいのである。

「つなぎの段」は、第三三段の「玄輝門院」——「よき人」の範疇としてかまわないかもしれないが——と、第三四段の「所の者」は微妙だが、「よき人」の話であり、その人に対し、「よし」と判断される根底には、兼好に新しい知識を知らしめてくれた人という点が一致しているのである。

兼好の興味は、第一部の、尚古趣味から、変遷し、過去は尊ぶものの、現代の人間、それも基本的には地位のない、無名の人間を中心へと移っていくようになることとはできないだろうか。それが「つなぎの段」の存在価値ともいえよう。そう考えると稲田氏の、説話的傾向に移るといふ考えも切り口が異なるだけで、私見と重なりあうともいえよう。

兼好は、つなぎの段で再生し、第三八段で、復活した「己」の考えを主張、宣言するに至ったと見るのである。

そうすると、第三八段に続く、第三九段以下の存在も理解できることになる。

第三八段で、第一部での人生を消極的・悲観的に見ていた自分からの

復活、積極的に生きる、という宣言だと考えた場合、なぜこの四段が続くのか、という点に注目される。

以下、結論の項でまとめた。

九、結論

第二部は、第三一段から書き始められた。それは人生にうちのめされた消極的な自分から、積極的な自分へと移行行くプロセスである。第三一段から、第三七段まではいわゆる「つなぎの段」と考える。第一部で置いた筆を再び取り上げたのである。事は慎重に運ばなければならない。自分の考えに間違いがないか、一字一字、一歩一歩慎重に。そして第三八段で、ついに爆発、そして、積極的な生き方の宣言である。

第三一段からは、基本的に、抽象的な、無名の人間の意見を取りあげ、「をかし」「よし」と肯定している。そして、それこそが、本作品の意義だと確認し、第三八段を力強く記すに至った。兼好の内面の噴出である。第三八段で自分の内面にあふれるものを宣言し、自分の人生観が固まった以上、怖いものはない。言い換えれば、「何でも見てやろう」「何でも書いてやろう」である。ただし、この場合の「何でも」は、兼好の価値観に一致したものである。その価値観とはなにか。

第三九段は、法然上人の教えである。鎌倉仏教の柔軟さに兼好は目が覚める思いだった。

第四〇段は、因幡国の変った娘の話。こういう親子もいるのだとい

う発見。

第四一段は、競馬で自分の意見が民衆に受け入れられたという体験。

第四二段は、行雅僧都の恐ろしい病気の伝え聞き。

いずれも新しい発見である。兼好の知識・価値観からは想像もつかない事実の発見に目をむけたと言えよう。

一部での中国や日本の古典によりかかる、懐古的・尚古的な、消極的な兼好が、現実を目を向け始めたのが、第三一段から第三七段までの「つなぎの段」である。そしてそれを記す過程で、積極的に生きる自分になった。だから、形の上での二部の始まりは第三一段だとしても、本当の意味での、内面的での、二部の出発は、第三九段からということができ

る。
とにかく第三八段は、本作品にとって、もっとも重要な段の一つとして位置づけておかなくてははいけないのである。

注

- (1) 平成一六年三月刊行
- (2) 平成二二年三月刊行
- (3) 平成二二年笠間書院発行
- (4) 平成二二年笠間書院発行
- (5) 昭和四九年有精堂発行
- (6) 『モオツアルト・無常という事』（新潮文庫所収・「文学界」昭和一七年八月刊行）

(7) ご讓位の時、群臣に酒宴を賜る儀式

(8) 天皇が父母の喪に服される一年間

(9) 『徒然草の鑑賞』（有精堂）による

(10) 「智恵出でては偽りあり」は「老子」、「可・不可は一条なり」は「莊子」、「まことの人は、智もなく、功もなく、名もなし」は「莊子」による。ただし、「才能は煩惱の増長せざるなり」は兼好の独創ではないかといわれている（『徒然草の鑑賞』による）。

(11) 「万事は皆非なり」は、「杜詩」「新線朗詠集」に見られる。

(12) 『方丈記』（築瀬一雄・角川文庫）による。